

オペラは友達

鈴木敬治

No 6 「アイーダと藤原義江」

話はぐっと戻ります。「オペラは友達」の執筆を開始してから、いろいろと古いものが出てきて、記憶のかなたにあったものが次々と現れて、今まで書いてきた事と辻褄が合わなくなってきました。どうも初めて劇場でオペラを鑑賞した演目はアイーダだったようです。

東京文化会館での藤原歌劇団の「アイーダ」公演 1969年11月14日から24日にかけての公演を聴きに行っていることを発見しました。全く記憶になかったのですが、立派なプログラムが出てきました。

おまけに藤原歌劇団の創設者の藤原義江にサインまでもらっているのに残念ながら、なんということか全く記憶がない。会場の東京文化会館は JR 側正面の入口からまっすぐ入ると大ホールの入口、入って左に折れると小ホール、正面入り口の左側が楽屋への入口で、ここで出待ちをするとサインをゲットすることができます。当時のキャストは、指揮がなんとクルト・ヴェス、アイーダ 山口和子、アムネリス 成田絵智子 アモナズロ 栗林義信 ラダメス ジョゼッピ・ザンピエーリなど錚々たる面々でした、しかし残念ながらなぜか記憶がない！

ちなみにプログラムに藤原歌劇団の名簿が載っているのですが、理事長 藤原義江のほか、理事には三井八郎右衛門、堀内敬三、大屋政子 などまたまた錚々たる方々の名前を発見しました。

文化会館の地下は練習室や楽屋が占めており、のちに東京交響楽団の専属コーラス東響コーラスに所属するようになり、ここには練習で何回も出入りするようになりました。実は楽屋入り口がもう一つあります。大ホール入口に近いところに二階のレストランに行くらせん階段があり、これを地下に降りると楽屋口に通じてます。また、文化会館にはその名が示すとおり文化活動として楽譜、音楽書籍、レコード CD、ビデオなどのあらゆる音源を保存閲覧できる資料室が4階にあり、登録すれば無料で使用することができます。役作りのためいろいろな音源を聴き比べたり、DVD で演技の参考にしたりとずいぶん通いしましたが、コロナのため現在音源は使用できず図書のみが閲覧できます。また録音できる音楽スタジオも併設されています。

話はヴェルディ作曲「アイーダ」に戻ります。1869年に開通したスエズ運河（明治2年なのですね）の記念に建設されたエジプトのカイロ劇場のために作曲されました。しかし結果として、作曲が遅れ、劇場の柿落としには間にあわず、運河開通後の1871年12月に初演されました。

あらすじは

エチオピア人奴隷でエジプトの王宮に仕えるアイーダ（実はエチオピアの王女というトンでもない設定）とエジプトの将軍、ラダメスは、ひそかに恋をしている。一方エジプトの王女、アムネリスは、ラダメスに恋をしているがエジプトは、エチオピアと交戦することになりラダメスはその総指揮官となる。結果エチオピアは負け、アイーダの父 エチオピア王アモナズロがエジプトの捕虜になる。アイーダは父にラダメスからエジプト軍の配置を聞き出すように言われ、アイーダはラダメスに国を裏切らせる。ラダメスの国への裏切りがあかみになり、裁判にかけられる。生き埋めの刑が決まる。アムネリスはアイーダを忘れるなら許すとラダメスにせまるが聞き入れず、ラダメスとアイーダは共に愛に殉じて死ぬ。

という悲劇です。

ところでヴェルディ作曲「アイーダ」には有名なラダメスの「清きアイーダ」アイーダの「おお私のふるさとよ」古今の愛の2重唱の中で最も美しい旋律と言われるラダメス、アイーダの「さようなら大地、涙の谷よ」など珠玉の名曲がありますが、皆さん何といても思い出すのは2幕2場に登場するエチオピアに勝利し凱旋するときの凱進行進曲だと思います。

また演出としてのスペクタクルが有名です。ここで使われるラッパが東京オリンピックでも使われた直管部の長いアイーダトランペットと称されるもので、舞台上や客席の一部で奏でられます。

野外劇場での上演も多く、その際は多くのエキストラが出演して動物も多く出演するなどしての一大スペクタクルとして人気を博しております。ローマのカラカラ浴場跡では馬が登場、エジプトではゾウが出演したとのうわさも。

「アイーダ」はヴェルディの出世作NO1の人気を誇るオペラで、アメリカで一番の劇場メトロポリタン歌劇場での上演回数でも椿姫と1、2を争う作品です。

突然ですがオペラの入場料はいくらぐらいだと思います。

日本だとその演奏される、いわゆる箱、会場と団体によって大きく違い、藤原や二期会では1-3万円のものも多く、海外の引っ越し公演では4-5万円のものがあります。私たちが出演する小さい箱では3、4千円から一万円がほとんどです。

パリに駐在していたころのオペラ座のチラシがでてきました。添付のものを見てください、価格は2種類ABあります。これは舞台装置やエキストラが多く出演するオペラは高くB、バレエや小規模なオペラは安いAということです。この当時80年代はフレンチフラン1FF=¥50くらい、90年代は¥25くらい（書いていてFFrの下落ぶりにアッと驚きました）ですので一流の芸術が安く鑑賞できるということです。

チケットは当時オペラ座内のチケット売り場に出向くか、郵送で申し込むか電話予約でしか買えませんでした。いまは世界中からネットで予約できる便利な時代となりました。

今も昔もいい演目、いい席のチケットを取るのなかなか競争が激しくむづかしいようです。ただし高級ホテルにお泊りの方ならコンシエルジュにたつぷりチップをはずめば、不思議なことになぜかどこからかチケットを調達してくれることもあるようです。

